

Voice

マコトは三十三歳であり、独身の男性であり、IT系の

ベンチャー企業の経営者であった。彼自身はゼロから起業するというタイプではなかったけれど、大学時代の友人であるタニグチに誘われるかたちで会社の立ち上げに加わり、成功を収めた。経営者といってもリーダーとして部下（年上の社員も大勢いた）をまとめたり引っ張ったりしているタイプではなく、そういった役割は共同経営者であるタニグチが務めていた。マコトは理系であり頭の回転も速かったので、システムの開発やサービスの改善のように事業そのものを動かしていくほうが得意であった。相棒との相性が良かったからか時代の流れにうまく乗れたからか、もしくは両方の理由で会社は成長し、これまでのところ大きな問題も起きていなかった。

けれども最近、一つだけ彼の心に引っかかっていることがあった。それは新しく入社した二十代の女性社員の存在だった。

彼女の名前はツヅキであり、一言でいうと彼の苦手な性格を持ち合わせた女性である。人事に関してはほとんどすべてを相棒に任せていたので彼女の採用にマコトはそれほど介入していなかったし、目の前の仕事が忙しくて面接にも参加できていなかった。そんなわけで、なんだか相性がよ

くない気がすることに気がついたのは彼女が入社して数か月ほど経ってからだだった。

初めのうちは新人であり年齢も若いという理由から大目に見るようにしていたが、だんだんと彼女の仕事の質や態度に苛立ちを覚えるようになっていった。マコトは細かところまで丁寧に仕事をする人間だったので、ちよつと気をつければ無くせるはずのケアレスミスや「言われて初めて気づく」改善点の多さに正直言つて辟易していた。彼女の人格を否定するつもりや攻撃的になるつもりはなかったが、提出されるものの八割はやり直しという状態が続いていたので本人にはけつこう堪えているみたいだった。だからといってチェックを甘くするわけにもいかないし、彼女が成長するのをのんびり待てるほど業務に余裕のある状態でもない。自分のほうから何かしら働きかけるべきだと思つてはいるけれど、そういったコミュニケーションはマコトの得意分野ではない。早い話、彼は困り果てていたのだ。

そんなふうには彼の心に引つかかっていたことが「問題」になり始めたのは、相棒であるタニグチが彼女に好意をもっているらしいと発覚してからだった。

男性のエンジニアが社員の大半を占めるなか、事務職くらいは多様性を考えて積極的に女性を採ろうという方針は確かにあつたし、実際に事務を担当するパートの社員は

ほとんどが女性だった。けれども、それはやはり相応の能力がある上での方針だろうとマコトは考えていた。ツヅキに関しては他の女性社員に比べて明らかに仕事の経験も少なかったし、相棒がどうしても彼女を迎え入れる判断を下したのか彼にはしばらくのあいだ理解できなかった。

彼がその真相に気づいたのは、彼女に対しての不満をタニグチに向かってこぼしたときだった。予定が合って久しぶりに居酒屋へ行つたとき、酒の勢いもあつて普段は抑えているクレームのほんの一部が出てしまったのだ。それを耳にした瞬間、相棒が少しだけ表情を変えたことにマコトは気がついた。ほんの一瞬のことだったし、相棒をよく知る自分でなければ見逃してしまうであろう変化だったのだけだ。ど、それはこれまでに彼が見せたことのない表情だった。適当に話題を変えてその場はやり過ぎたのだが、それから改めて社内での二人の様子に目を向けてみるとタニグチのほうは間違いなく彼女のことを異性として見ているようだった。長い付き合いだし、そういう感情が表に出やすいタイプだったのでマコトは居酒屋の件から想像していた自分の結論に確信をもった。

彼は戸惑った。もちろん戸惑った。第一に、相棒は既婚者でありその相手はマコトの大学時代の同級生でもあった。彼らは在学中に付き合い始め、そのまま無事にゴールインしたのだ。結婚式ではスピーチを任せられ、今でも月に一度くらいは二人の家に招かれて食事をしている。彼女のこと

を考えるとマコトの胸は痛んだ。それにもまして、これからどんな気持ちで二人と顔を合わせればいいのかだろうと途方に暮れた。

第二に、タニグチは不倫をするような男ではないはずだった。その誠実さには彼も昔から感心してきたし、会社や事業を成功に導いたのは彼の人柄があつてこそだと思つてきた。そもそも嘘をつくのが苦手な人間であり、隠し事をしてほとんどマコトに見破られては笑われるという始末だった。結婚生活に問題があるようには見えなかったし、そのような話を聞いた覚えもない。そういう意味では、相棒に何かがあつたのではないかという純粋な心配をマコトは覚えた。彼は何かしら暗い闇のようなものを抱えているのではないだろうか。

第三に、これが最も厄介な現実なのだが、ツツキは会社の人間でありしかもマコトと相性の悪い人物だった。これ以上に厄介な設定があるだろうか？ 彼は自分が知らないあいだに演じたたくもないドラマの役を強制的に押し付けられていたような気がして、決して愉快的気分にはなれなかった。順調に経営されてきた会社の中に一つの悪玉菌が生まれ、平和だったマコトの日々を脅かし始めたかのように感じていた。

ある日、ちょっとした事情があつて彼は相棒の代わりに社員との面談をすることになった。すべての社員と月に一

度、三十分程度のミーティングを一对一で行うというのが経営者であるタニグチのルーティンになっていた。急な仕事の用件が入り午後から席を空けるので、残った面談をやっておいてほしいとマコトに言い残して彼は足早にオフィスを出ていった。社員とのミーティングを代わることは自分はこれまでに何度もあつたし彼自身も定期的にそういった機会をつくるべきだと考えていたので、なんの問題も感じないままマコトは目の前の業務を続けた。そのことを後悔したのは、一時間ほど経って面談のスケジュールに記された彼女の名前を目にした時だった。五分後には会議室で顔を会わせなければならなかったので、あれこれ考えたりの準備をする余裕はない。マコトは相棒に対して文句を言いたくなつたし、彼が何かを企んでいてその策略の一部に巻き込まれたのではないかと不安にも思った。

遅刻するわけにはいかないので（人を待たせるのは彼の美学に反する行為だ）、会議室に向かいながら頭の中をさつと整理した。そして「これはむしろ良い機会かもしれない」と自分に言い聞かせることにした。二人の関係がどうなっているのかは知らないが、それとは別に仕事のことですっかりと話をする必要があるだろうと彼は考えた。あくまで一人の社員として向き合い、話に耳を傾け、自分が日々感じていることをできる限り穏やかな表現で伝えてみよう。

会議室の扉を開けると、ソファに座っていた彼女が立ち